

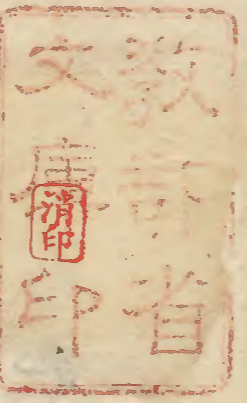
鹽尻

大 政 官 文 庫			
和	一	一	
書	四	九	
門	七	一	
	二	一	
	五	二	
	六	五	
	册	册	

内 閣 文 庫			
和	一	一	
書	四	九	
類	七	一	
	二	一	
	函	二	
	架	一	
	册	册	

内 閣 文 庫	
番 號	和 11497
册 數	65 (8)
函 號	211 302





古事記ノ抜抄

八 内一二七九〇號

花山院癸心ハ弘徽殿ノ女御ハ恒徳ノ薨逝ニ御悲歎之

處ニ町尻殿ニ得テ便庫ニ書キ無常法ニ文ヲ奉リ見セ被レ勸メ申サ

御出家ノ支ラ師共出家シ可キ御共ス之由被レ契リ申サ而令セ

弟御首給ラ之後申ラズシト、ニカワラヌスカク

一度、テ可キ歸リ參ル之由申テ遂電ス其時我



ルナリケリトテ涕泣シ給ノ云云
鳥呼帝荒嬉ニヲ狂愚ナル者如斯ノ藤ノ道兼
倭シ也ニ已カ私スル皇子ヲ立テ威ラ

張ントス故ニ胡書ノ語ヲ以帝ニ饋エホシ帝胡ウ白ト
ナルヲ待テ捨レ之ヲ飯ル帝ノ昏弱ヒヤク落涙シテ止
其後又娼行シテ伊周カ爲ニ疵辱セラルルシテ癡
監行得テ名ツクヘカラス然ルニ浮屠氏
花山三十三所ノ觀音順礼ノ初ヲ以テ
崇レ之知人浮屠氏カ学人ノ心術ヲ度外ニ
錯テ只佛ニ倣スル善トスルマシト思シ嗚呼
可シ惡ム可シ賤

一條院崩御之後御手習ノ及古トモノ御手

筥ニ入テアリケルヲ入道殿道長御覽シケ

ル中ニ慕蘭欲茂秋風吹破王事欲章アキフカキ諛臣

乱ル国トアソハシタリケルヲ吾妻ヲ思シ召テ令

書給タタリトテ令レ破給ヒケル子ノ昔ノ下ノ人ノ武ノ時ノ

一條院美質アリシカトモ婦女ノ如ク道長
カ制ラ受テシカモ彼カ權ヲ盜ミ驕僭不
道ラ警メ給フ事不能夫藤氏政ヲ私セル
コト良房基經ニ萌テ道長ニ元極ス當時ノ
アリサマ枕艸子栄花物語ヲ見テ可シ知レ之
迂臣宮女嬪行ヲ專ラトシ敢テ道ヲ不知其
俗源氏物語ヲ讀テ可シ考時勢如キ此故ニ作リ
物語モ亦如是歌曲ヲ以テ其代ノ政ヲ知
者是也遂ニ武臣ニ柄威ヲ執ラレテ朝家衰
廢セシ者職トシテ道長カ驕愚ニ依レ
リ嗚呼

後三條院云云延久ノ善政ニハ先器物ヲ被レ作ラ

ケリ資仲卿藏人頭ニテ奉行^{セリ}之^ラ云々并ラ召寄取
廻ニ御覽ニテ簾ヲ折寸法十トサセ給ヒケ
リ米ヲハ穀倉院ヨリ召寄テ於^テ殿上ノ小庭貫
首^ニ以下藏人出納^ヲハ加^ハ屋紙^ニ景^テモテ參
リケレハ叡覽ナリテ被^レ加^ハ勅封^ラ云々斛^ニ畧^ハ方
櫃^ヲ差テ石ヲ括リテサケウモシ^ニメ跨^ル木^ニ
懸テ於^テ穀倉院^ニ因々米ヲハ納^ラレケリ仍テ
何石トハ用^ル石字^ヲ也件ノ器石等^ヲ于今在穀

倉院

帝仁智剛毅飛龍ノ曰藤氏僭^レ驕^ラ懲^シ源師
房^ヲ拳^大江^匡房^ヲ用^テ親^政ヲ^ナシ結^フ
安^民ノ^叡旨^ニ依^テ米^穀ヲ^自沙^汰シ^給フ
嗚^呼全^筭不^レ壽^曼天^云々
按^{スル}此^書吾^國始^テ石^字ヲ^用シ^カ書^{セル}ハ^非カ
堀河院云永長元年大田示事或^ハ記^曰李^仲七
月十二日有^リ殿上人田樂ノ事三十余人^ヲ裝束
或^ハ兼^テ被^テ仰^定紅^帷有^リ風^流以^テ冠^宮蓋^為笠^差貫
有^風田^主藏^人少^納言^成定^勅定^火笠^上風^流多^目

也事外已上藏人所調備一足顯雅毅經忠高宗
輔懸修理大夫顯季朝臣右中兵宗忠朝臣左
中將顯實朝臣兵衛佐實隆侍從師重步輔季
銅^{柏子}前兵衛佐長忠朝臣右少兵時範民部
大輔行信治部大輔敦兼^{佐々良}兵衛佐師時少
將顯道左馬頭師隆因幡守長實周防守經忠
藏人盛家小穀權弁重資朝臣推助家定民
部權大輔基兼美作守基隆等云笛吹右馬頭

兼實朝臣藏人式部丞宗仲也云日々夜々
在々所々諸院諸宮大殿闕白藏人所已下郷々
村々田糸或ハ被召貴所或參詣神社云々

按ル曰糸東常ノ武俗田向ノ戲藝也然レ此
時朝廷コレヲ弄ヒ給シ事如是雅糸ノ変
此見此後世此藝ヲ愛セシ事久シ鎌倉滅
亡ノ前大盛ナリ足利家ノ中世文一変
シテ猿糸ノ藝田糸ニ倍シテ美ヲ尽シ奢
ヲ極ム中ニ間美童ノ艶色ヲ交ヘシ近世
又変シテ狂言稱スル者弥々ハレ弥色ヲ
専ニスコレヲ考テ世ノ風流俗ヲ知ルヘキカモ
堀川以下賢主十ク安徳没メ海後皇家大

二裏又不知...

堀川ノ院御時殿上人競馬ハ左ハ打毬装束
右ハ拍毬装束ヲ召テキセラレケリ不被用
普通競馬ノ装束ヲ云

按キ毬ヲ舞者ハ赤衣ヲ衣拍毬ヲ舞者
ハ黒袍ヲ差ス今ニ競馬ノ左右赤黒ノ袍ヲ用
フル者ハ堀河院以來ノ服カ然レハ四位黒
五位緋ノ位袍ニハアラストミタリ

石弟一卷

御昇晋

昇進ト同

高家者業卒之末葉也業平朝臣為勅使参向

伊勢之時密通於舒王懷妊生男子依有

露頭之怖令撰津守高階茂範為子師尚是也

三代実録ニ多業卒放縱シテ他ノ才学ナシ
唯リ和歌ヲ能スト史ノ記ス所如レ此ノ夫業
平ノ姪行伊勢物語ノコトキカ大御宮
奉祀ノ皇女ヲ祀シ子ヲ生セシ罪容ルハ
所ナリシテ幸ニマヌカレタリ廷臣ノ帝
紀政典ヲ外ニシテ伊勢物語等好色ノ書
ヲ口授秘決トシ風流トス故ニ後人業卒
ヲ以テ賢ノ如シ且ツ陰陽ノ神等稱ス一笑呵々

雜

実方経 廻奥州云彼国依^リ無^キ菖蒲五月昔

水州ハ同事トテカツミ^テ被^レ菖月ケリ其

後習テ今^ニ如^シ斯^ノ新撰陰陽書ニ云ク

五月可^レ菖水州云

按^{スルニ}菖蒲ハ水州^ノナル故^ク菖^ク之^ラ欽夫^ハ五月ハ

午^ノ月南方籬火^ノ時^{ナリ}水州^ヲ以^テ火^ニ能

去^ル意^ニヤ

右券三卷

大佛殿 云東大寺也 白身本

雜役牛

俗^ニ北馬^ヲ以^テテ^テマク^ト云^フ乘^馬ニ用^ヒス

雜^事役^{スル}ノ^称カ^牛モ^亦乘^事不^レ用^シテ

雜^々ノ^事ニ^ツカ^フ故^ノ名^ナル^ヘシ

宇多ノ御宇利仁將軍打^ツ新羅^ノ之間^於テ彼

国^ノ海上^ニ頓^滅ト云

昔^為公家御祈^レ被^レ行^ハ八講^ヲケル^ニ退^凡下乘率

都婆ノ銘イカ^ニ書^キタルト問^タリケレハ金

輪聖王天長地久御願^ハ満^トコソ書^タレト

答ケリ

少將阿闍梨覺豪ニ僧加ノ句ニ南無熊野三
所權現五体王子ト云後日被ラ仰ヤ云ク法性寺如キ然
之僧加ノ句ハ近來御子驗者トテ劣ナル事
也云

當時淳屠氏甚熊野ヲ尊崇ス故ニ佛事ト
云ハ祈ノ時ハ如レ此唱ケルニコソ凡ハ其
時熊野繁昌シテ驕逸ノ所行モ多カリシ
ニヤ同卷ノ末ニ熊野ノ別當湛増之許ナル
桂林房ノ上座覺朝ト云僧人ニ殺サレタ
ル事ヲ記シテ曰熊野川習雖無キ指事人ヲ
殺ス事如レ此云官家此寺ノ惡俗有レト禁
スル事不能レ凡ハ雖能野尊崇モ徒ニ淳屠カ

欺誑ニ誘レテ也ハ可レ怪ク可レ歎ス

右弟三卷

延曆十年八月五日子刻有リ盗人一燒リ太神宮云
同ク廿三日仰テ伊勢美濃尾張參河等ノ国令ム造
進件テ殿舎ヲ

敦実ノ親王奉レ造ス之ニ大菩薩八幡御影二体一僧一体一
俗一奉レ御供被レ致サ祈請ヲ之後被レ奉ラ拜見之
處僧形ノ御供被レ之ニ御箸云依テ之法体為ニ御

体_ト奉_レ安置_二外殿_一多_ク被_レ寄進_セ田園_ニ云_レ件御体_ニ云_レ白檀
僧_ノ形_ヲ首_ニ載_テ月輪_ヲ御手_ニ令_レ持_テ翳_給ス云_レ

勝_レ光明院ノ宝藏_ニ御座_ス御影_是也_亦弘法大師

御渡唐之時_手自奉_二圖繪_一給_フ之御影也_{僧_ノ形_ヲ載_テ月輪_ヲ令_レ}

_{持_テ錫杖_ヲ給_テ}大師_ノ皈朝_ニ之後_{奉_レ安置_二高雄寺_一荒廢_ニ之後}

鳥羽上皇_{尋_レ召_セ年_ノ記_{何_レ被_レ安置_二件_ノ宝藏_一}}

鳴呼應神聖主_ハ儒風_ヲ崇_ヒ辰氏王氏等

ノ鴻儒_ヲ召_シ學_ヲ講_シ道_ヲ教_ヘ給_ヒシ

浮屠_{誣_テ胡佛_ニ混_シ割_ヘ我_ノ聖帝_ヲシテ}

乞食_ニ誣_テ子_ノ載_ノ下_ノ聞_テ之_{歎_{息_ニタ_ヘス}鳴}

呼_可惡_可誅_スハ彼_ノ胡族也

鴨社_{祢_レ曰_ク季_ノ繼_{保_延六年_{正月_{廿三日_{依_レ當_番}}}}}

通_二夜_一御社_{之間_{夢_ニ八幡宮_{ヨリ_{ト_テ獅子頭_ヤ}}}}

鋒_ニト_ト射_ノ物_ノ神_ノ宝_{多_ク持_テ運_テ舞_{殿_{置_ケレ_ハ}}}

彼者_{何_レ夏_{ヤ_ト問_ハ神_{人_{等_{答_曰八幡宮_{燒_失}}}}}}

候_ハ大菩薩_{是_ハ令_レ渡_{御_セ也_{ト_云夢_{覺_ニ之後_云}}}}

自京_{參_{詣_ニ人_{云_ク夜_{亥_{時_{八幡宮_{燒_{失_{スト云}}}}}}}}}

按_ス是_{季_ノ繼_{カ_{偽_リ設_{ケ_{タル_{事_{十_{ル_{ハ_{シ_ハ}}}}}}}}}}

幡山_{燒_{失_{廿三日_ノ夜_{十_{レ_ハ鴨_{邊_{ヨリ_火}}}}}}}

氣見エヘシ何リ夢ニ説シテ神異ヲ言哉
如レ此証說祠官當時多シ皆淳屠カ教ヘニ
習フ故也後世ト部ノ兼俱神異ヲ作却テ
耻ヲ残セシ

因云ク獅子頭ハ後世祭庭ノ散糸也其器
神宝トスル者亦掘ニ此藝異邦ヨリ傳
悉白氏文集ニエタリ

一條院御宇北野天神御贈位贈官ト云、御位

記筥ヲ置案上再拜シ讀申ス時絶句ノ詩化

現ス道風ノ手跡ト云、

嗚呼是異邦天書ノ類也甚哉淳屠氏ノ誣
神人

園城寺鐘ハ昔時代不明粟津有男武勇者也

建立堂欲鑄鐘ヲ為尋鉄ヲ下向出雲国渡海間

大風起浪ヲ乘船之輩叫喚時小船一艘小童取楫

出ラ来ル云主人可乘移此舟不然可入海

迷惑乗移之間小船入海底到龍宮龍王出テ

逢之為讎敵徒類多被亡畢今日殆可被害

仍所迎申也可然者一天可射給冠者請之昇樓

相待之處大蛇来臨向サマニカブラ矢ニテ

射入_レ口中_ニ古根_ヲ射_ニ切_ル喉_ノ下_ラ大蛇退_クノ向_ニ追_サマ
 ニ又_シ射中_ニ早龍王喜_テ云_ク此悦_ニハ隨_テ願_ニ可_ク冠_ス
 者云_ニ雖_モ造_ル一堂_ヲ未_ダ鑄_レ鐘_ヲ龍王其安_キ事也_トテ所
 鈞_ル之鐘_ヲ下_シテ与_ヘ之_ヲ早飯_ニ粟津_ニ建_ス堂_ヲ廣江_寺
 時變_ニ件寺破壞_{之後}總_ニ法師一人為_ニ鐘主_ト云_ク鎮
 守府將軍清衡施_ス金十兩_ヲ於_ニ寺僧_{十人}其時三
 綱某_云集_メ五十人之分_ヲ以_テ五十兩_ヲ給_フ廣江寺_ノ法
 師_云寺僧等取_来テ鈞_ル園城寺廣江寺天台ノ末寺

也後日衆徒聞_レ之_ヲ搦_ル件鐘主法師不_レ日_今入_ル湖_ニ

右要_ヲト_リテ記_ス之_ヲ小説_ニ所謂_ニ三井寺_ノ鐘
 ハ秀卿龍宮_ニ入_テ所_ニ得_ルト古事談_ノ説_以
 異也_凡浮屠氏寺院_ノ縁起_問カ_凡事多_ク
 豈_ニ信_スル_ニ足_ニヤ

右弟五卷

安藝守基明俊憲 嬰兒之時正月戴_ク餅_之間_ハ

納言入道祝_メ言_フ才学者祖父文事者如_レ父_云

按_ス我國歳首稻餅_ヲ制_シ時食_トス各_ツ
 ケテ鏡_ヲ称_シ此_ニ向_フ時大槩祝_言シ古歌
 ラ唱_フ
 あああやかしの山城きりぎりすてそんちる君りまのち

是古へヨリノ風俗トミエタリ
但是ハ小兒菑固ノ祝をソリ
委桃花祭葉にミタリ

亀甲ノ御占ニハ春日ノ南室町ノ西南ニ御座ス社

ヲハ大詔戸明神ト申ス件ノ社ヲ此占之時奉

念云云

大詔戸ノ神ハ即亀ノ称也
右第六卷

續古事談ノ抜抄此書ハかる書にして多ク誤字有
可尋全本

造酒司乃大と云ふは不ハ三十石入ニ其は此ノ

造酒司乃大と云ふは不ハ三十石入ニ其は此ノ

あつ地より抜抄ノ傍ニ依リヨリ人驚キ怪ニ

る福ノ御門ノ者流リ三條院ノ御時大風吹テ

彼司たりと云ふは大ニ小ニ皆ウモヨリトけ

按シタリ文徳天皇ノ赤衡三年九月辛亥造酒司酒
麴ノ神從五位下大邑刀自小邑刀自等並預
春秋祭ト実録ニあるせるハ世壺カケリ

堀川院云或ル人内裏ハ柑子茂樹をまゐりせたり

りやをふまがいのつふは極てせせせせせせ人

滋口杯集りて本紙枯

少少為隆系りて是成るるあれハ何事そするや
や者(きこ)くハ倉持小舎人を召て教くよき
少少人カも不及君もあはせらるるなり

按(あ)りて為隆ハ坊門左大弁と称ス職事の時乃事あり
是亦威を振て上を犯し何れ君乃(き)物に近侍
乃(の)臣へはひ下家を伴(た)りしを正(ただ)し益(えき)ハ責(せ)責(せ)
を君(き)もあはせたりしハ官ハ法臣乃(の)罪(つみ)を正(ただ)職
分(わ)かれ為隆のせし新(あらた)人臣の体(てい)を以(も)つたり後(のち)世(よ)
何(なに)れを不知(し)只(ただ)管(かん)君(き)上(かみ)り諷(ふ)ひ近(ちか)臣(しん)は媚(めい)て自
利(り)を計(はか)む謀(ま)を先(ま)きと欲(ほ)し悲(かな)し

白河院成(なり)ハ前(まへ)より為隆(を)と奏(う)けけるよ題目

るのにおにきふりてうのさうよあたりりるを世次(よ)作(し)
ハ文(ぶん)成(なり)有(あ)り奏(う)けしとあはせりてあはれは
よ〜ハ居(ゐ)るなりたハ文(ぶん)今(いま)五六通(つう)なるに成(なり)
院(いん)たておけりハとあはせりて為隆(を)と次(つぎ)あはれ
系(けい)主(しゅ)大(だい)中(ちゅう)臣(しん)某(たが)謹(きん)テ申(ま)す請(ねが)ふ天(てん)裁(さい)するも續(つづ)くせ
まのいせよりりねえ太(たい)神(しん)宮(みや)成(なり)訃(ふ)が如(ごと)く帰(かへ)り
居(ゐ)るを治(ち)ひよりり吏(し)とあはれりてのこころを
ハとていふよりり云(い)ふ

為隆たる不寔は好君と亦 宗廟の事をまじ
おのりよきしりのあまきまのし

平城天皇乃は時おくる世國も朝政は後ひ
り其儀式いさほの福は主上出く南面りお
しまた群臣百寮おのりてをば按屯四方ノ訥人
さうりく内裏へ集り集りて言記机乃上よりせく
ぬこの箱としふ物をあまたりぬれはたや一の民
百姓まじくし文をりく系ひ世系小入し史お記
兵小納言杯次方よあ上りく号をよしし群臣

おのりて評定し堂上よのりて勅定をら
さるしきしと九右よ何は利めし同しりの
事高村ふりれはありを記してしるしきしを
おのりて日たけのむしやうて其をまじく供御
をまじくは法郷下孫をおのりておのりてを念ら
君をいんじら民衆愁をさるておのりておのりて
のちのあまりり云嶮峨天皇より以朱世りし
さるりり世系りのあま放逸りて改をいんじれ

法に次ぎれども其儀式ハ程有らり女位の養人二
人などして其倚子の如く是にまゝて愁をさうめ
群議をさうめ後よきことありて成敗せさせ
法にたりこれ今我職事の始に嵯峨の別業ふ
と一常にありてありる所よれいそぬなり
てみ川より朝政よ何れを法ハよりりる云云
君は臣を治に職をさうめハ君ありて君ありて
右ノ野干を神の体とめりる社乃多しとて狐

右ノ野干を神の体とめりる社乃多しとて狐

とゆるる者有りりる世者此より何ふらり半陳乃
定に及も法郷をめぐりて下る中に仰大納言経
信々して曰白龍の真勢懸れ法之の察細と計り
かろりわく居るまじりりいじり神ありとて
狐はまゝにほりておたる人を村たる人ハ何のと
かやんといふあり云云
凡禽獸や女に参り侍りて中世分の遙記あり
且神其現形をいふ大槩乃士佛者疑徒のいふ
々陳の議に及ひしと甚し一経信の言可し

故小納言入内人よきく敦親儒家のハレハ一ト
情士如物を回ハ不知ト云トイモれ少リ其回
る人不知ト云ハ何れいじからんそと云ル邊ハ
才よ文學者者ハ不知ト云ト不能アリ実文學
あるもの善し子を知り白も是るふり都りて
学問をしてと皆成る成知ありあふらむは才と
人の志するハ備事あり大小事を弁ルまで
ふ成学問のさじえとハリルありそれを知ぬハ

新儀を不問て不知といふを恥とせぬことをもしる

通憲の言なり記誦を事ト為義の学なり
されどもありりふハ流人但ト才よ智あり者
ハ不知ト云るを恥するとの一言好ト今窮郷貧士
の学文を友成ハ切磋するもの且書籍ト
トハ志の志の志の志ト学博ありすこれ其学也
人世は多しと云れを已りありを俗人ありあり
トあれも亦我よある者トトあり所ハ傍若
無人ト云を毎ト善知ト白するも有りて却る識者の朝
をみる者間あり

諸國地既り各人の流をいふまけあたふ人と年来
ありり記す或ル唐姓書の中に曰世ハ俄ハ謀反

人々しと名後祀室以降の大乱をありし者よし是等
をいづくんかお前乃時よおどしりささゆしとほりし
皆そ世乃人々我れは祭する所と知る色し此街は
うらふか我劇ハ皆淫乱めさのゆいして其声啼り
と〜恨り〜今俗民人情おして多〜さうと

六波羅乃大政入乃福原乃京を〜さ〜皆さり
後と云長方々世京と〜し〜ともの京民めさやを
え〜りる〜彼人の定に寄リ古京へ〜さ〜彼よ
し〜りり 文ヲ累リて 後又其定を〜りりる上達部
是を書ス
の長方々〜あひてさハかりの惣人のい〜しと

ありめ〜さ〜京民さ福よに〜し〜しをほしそしひ
をもむけて帰京乃依り進座しそ河さしひ〜ひ〜
板立あをい〜し〜流ハ〜と云られそ世の入乃の
ほよ叶〜んと〜そさハソひ〜其おハあか〜ぬ
新儀をゆひ〜る者〜めよわめひ立折ハ〜も
人よソい合さる〜ぬ〜そ志さ〜悔ハ〜あつ時
人よハ向〜そと彼京に居〜きとや世の〜さ
〜り〜に〜る〜し〜り〜を〜知〜り〜よ〜さ〜れ〜ハ〜ぬ〜し〜ハ

言細おむ(さ)るをれらる云梅小治中納言
乃友京氏定とく其時其人のほは有り

凡弊は仁せく新法をさるるの後弊へあさ事不能
其時必悔む人ありあはる家なきくわきとハ政め
是あはれ世の人難せやうし事をたふりに政む
とありハ小人乃俗情和漢かる不れしとん
君よつる者乃をさる義はあはるこは時ハ
とそと世悔あはる

右才二考

山王云 神同成信語りハ先祖ハ神の濱の位
人めく有りよハ父善ハ旅人來りて私をかりて曰

世濱は通つ人の世私はよあるべしとんふつとて
この木のよは世私有神人の志さるしとんふつとて
改命して同なる別ありて世に神家なるのこはる
世山のゆととも仁人となりハ利はを伴て世なる
け候代仁人の子孫あり神人ありとそ又傳教
大祓大和の之痛ハ神を勧誘して山王とすと
とヤス是を僻るあり大比叡小比叡皆大御
とそ前よりそさるるハ云

旧事本紀は比叡の神名おつれ最尊、親遠りよ
く次成依り返を、佐々神次形の事訪り
凡風事記の返の教ひの事多し

下野国二荒山云宇津宮ハ別宮あり狩人鹿の

此を供祭物よすといふ云

信州諏訪の大社よも麻を供すとや古ハ麻のけ
りせといふありや元朝の供御ト鹿肉
を拜ひし江家次弟よと云ふ

右弟三あり

前左馬佐基後月ノ前欲^{ラモウ}老ト云題よ

むしんハ差返入果て月と我と成共るる

近清舎人ハ弓矢を具すとし武勇ハ不及

者也 宇治殿の由延才ハ四布先生行武といふ者有

りる盗人をうて殿よ居る系りうりハ

ハ延才ハを習ふ者こりのけぢかぬとの

あひてそり交妙法ありるい何とあり

かめ金くやまより

夫延才兵仗を常き人ハ武備よ何して何をや
宇治殿の言非也直哉武成志れ只婦女のよ

ふりて政柄を武臣よこしくせらるるの嗚呼

右茅四卷

才ふ卷にハ唐ハ故事とあり唐以下
の史及ハ小説ノ有るありを珍しくけ
れハ存又類ノ傳もの

熱田祠官畧記

千秋大宮司

古尾張氏補之季範以来
南家藤氏也

馬場 權宮司

補物惣檢校

田嶋 權宮司

補祭主 稱祝師

權宮司ハ依テ年老ニ上座

五嘉丸 大内人

守部氏 尾張廣流ト云

右稱神宮大喜氏ノ一家モ亦神官也但シ大喜
氏者ハ劔宮奉祀之家ト云ハ
大喜氏尾張宿稱之廣流ニ家巴今一家断絶
宝永三年十二月相續

檢校

中藺丸座弟一ノ年老補之

別當

中藺丸座弟二ノ年老補之

權内人 中臈右座弟三ノ年老補ス之

神外右称ス三老

衣冠十人 中臈左右ノ座各五人三老次ノ年老

開闔一人

所司一人

中臈之内撰其人ヲ補ス之

旨宿直 一番頭 俗云組頭

祝師代官 林氏

二番頭

惣檢校代官 栗田氏

三番頭

大内人代官 長岡氏

神外右称ス三代官

御前役

栗田真人

神官列座之日薦ヲ敷等其其他神役多シ

郷役

栗田真人

神官列座之時供倍膳等議數多

厨家

栗田真人

右同上

兩師

大原氏
長岡氏

司神饌器ツネヨリ詞進スル菓子ラ役也

御供師

長岡氏
林氏
儀部氏各三人

詞進スル神供ラ役也

樂人

中藏家自古有リ其家

右中藏之内自古定其家

長役

俗云長大夫

祝部ホフリ一年老

神廐司

俗云御馬
屋別當也

祝部座

千中大夫

神樂役

神子座中勤レ之ラ

惣市

自リ祝部座出ス之

神糸市

自リ神子座出ス之ラ

燒夫

三人

鷹使

一人

猿糸

官福

中藏上宮八十余家

林

栗田

大原

儀部

長岡

下宮

八^下劔宮

祠官

大京

松岡氏

神官 大喜氏

主殿頭

林代官 番組頭

大喜氏代官

松岡氏

瓜丸 祠官

大喜右京代官

鏡味氏

御前役 右中右之御前

御前役

大京真人

師役

若山氏

御供師

長岡氏

此外畧スレシテ

凡中蔭下ノ宮五十余家

大京

松岡

鏡味

若山

祝部座ハキ師姓稱菊田有數家其中稱峯

松者一家但同姓云神子座ハ鏡味氏也

高倉宮祠官

松岡

大京

磯部

知我麻ノ宮

俗云源太夫

祠官 磯部

大京

鏡味

日破宮祠官

若山

大京

氷上宮祠官 久栄氏

供僧

如法院

権座主 山定坊

宝藏坊

持福院

兼仕二人 今一人

右天台宗属 輪王寺官

神宮寺

院家

醫王院

色衣

不動院

色衣

愛染院

右真言宗

尾張氏ハ天孫天火明尊ホノアケルノミコトの御子天香山命カコヤマノミコト後胤小

豊命スヘの裔也朝家ニ仕テ尾張國造トあり

代々熱田社ニ祀テ奉ル孝徳天皇御宇尾張

宿禰忠命ミチノ神ノ今ノ宮ニ遷リナリ

山本朱鳥アカミトリに稻君稻與天平與貞相續て専ら祀を
奉り其子季與十八世孫貞信三子有り嫡子
貞頼ハ祭主にして田嶋家乃祖二男信頼ハ馬
場家祖三男貞職ハ大官司ニ補シ伊勢守ニ任せ
らるル其女ナリ藤原季兼に嫁して季範と生
せし外祖氏譲を以て始テ大官司とあり神託云
是より大官司彼家より相續して尾張氏をハ
不補也とて貞頼信頼の子孫ハ代々祝詞師と

惣檢校との職よりして断絶あり物より後柏原院御宇
尾張宿禰仲和明應六年より大永三年まで二子有り嫡男肥後
守仲安ハ家督めし祝師祭主の職に居り二男利仲
其子仲近惣檢校とあり是ハ信頼の嗣系絶つる
有ル其子光仲其子左京亮仲種今之惣檢校也然レ今ノ馬場家ハモト田嶋ノ康流也
物より仲安子丹波守仲定の妻ハ愛智郡星崎城主
山口松雲其女其妹ハ前ハ關白豊臣秀次の妻也
女子を生キ文祿四年秀次自尽の後松雲ハ勢田の田嶋

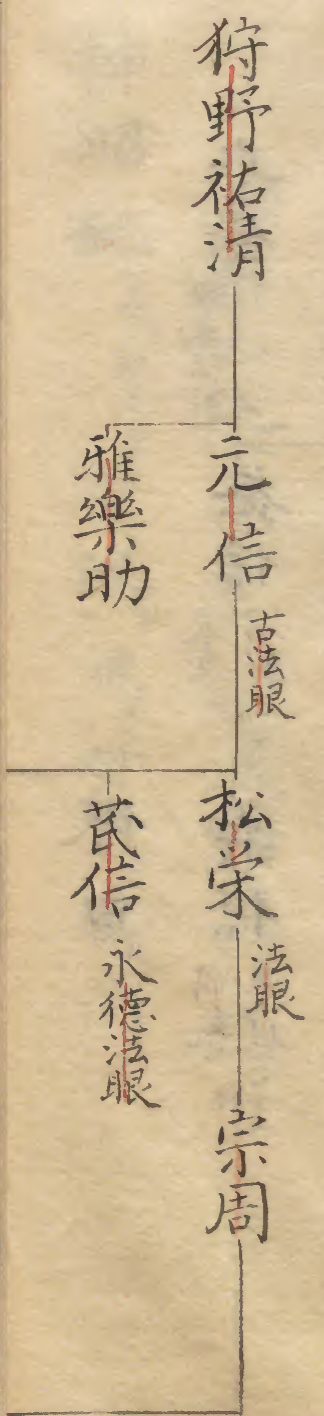
隠居先仲安ハ秀次ノ縁有リ且ツ松雲と己の原
至半と秀吉とて田嶋家領二十六村通計三百
五十三カ文ノ地を減僅百五十文の地とす其威をとおせ
て仲定天正八年より寛永四年よむりて四十八年
祀り勤仕せし男子ありて家系絶たんと欲
我警余して惣檢校仲近ノ二男馬場忠之勝来
他別左住の子仲秀と立て田嶋家を継ぐの祝師よ
補丹波守よ任せむ今の祝師内務權頭ノ父あり
寛永十七年より奉供り

是を以て今ノ田嶋家ハ馬場家の庶流の也
但し始の田嶋家ハ馬場家をお續せし今
為家ハ根本田嶋ノ仲和の裔ニ呼神代より今
日よむりて一姓ノ系譜性よ一代も他姓より家
こし半ノ紀家ハむりて半世家ハ傳り也
田嶋氏の家系ハ永仁四年不書ノ古本の尾張氏
系圖一卷を納め今又正六位の上内藏權仲頼
宿祢家課と正一系圖一譜を記せり予幸に是

と請写あり其大槩を書して送忘は備もの
 勢田上宮或大宮と称す東門の額ハ小野道風の筆に
 其額とハ田嶋家に納る丙戌四月二日是を
 春敲門の大字解に之れ傳れ其他代々の倫吉の
 教書宮廳に差定諸祭の祝詞教知も彼家
 より有り正月十日昔廿二日踏分の時讀ハ詩頌乃類
 ひりていと古記よの誠ハ古家ありてハいつて
 かる旧記傳へて今武家一時家と起て富貴

乃威世のりやにゆる家と世家にあつてはかか
 傳ゆる所とありて是ハ言曾の右をり詳せ
 ざる多しことハ世運の盛衰ありて冷齋獨流
 の末とハあるとも譜牒を納て世たつて
 いともかりてさすたれり

。繪所狩野畧系



休白

守信 探幽法師

益信 采女 洞雲

義信 洞春 春信

守政 圖書

守定 主殿 年重 探雲

尚信 主馬 自適者

常信 右近 養牧

兼信 元公 周信又春信 如川

安信 牧心 永真

時信 右京

主信 永叔

古信 栄川

永真

先考忌祭之祭文

寶永三年歲次鼈主仲呂上弦扶嚮

孤子信景

謹以薄微之尊俛而奉酌之嗚呼哀哉寒去

暑來鳥兔寢跡庭草代綠既二十有三祀追

遠感時昊天無極花落水流江山新恨鬱々

臺雲未見一鶴之飯而陰々曉林更添群鴉

之泣而已執禿筆袖淚轉盈嗚呼

神昭鑑美孤子中忱ラ嗚呼哀哉尚クハ

郷食^{ケシ}

指^ス辨^ハ香^ノ曰^ク

残^レ腫^レ一場^ノ夢^{トシテ}

往^ル塵^ノ千里^ノ雲^ノ

子^ノ規^ノ空^ノ喚^ク曉^ノ

流^ル恨^ノ入^ル南^ノ薰^ノ

嗚^ク呼^ク

古^ノ禊^ノを^{カクシロ}ハ^ノ戸^ノを^{カクシロ}以^テ主^トと^シて^シハ^ノ神^ノ象^ノあり

礼^ノ器^ノハ^ノ隻^ノハ^ノ戸^ノを^{カクシロ}立^テ以^テ殷^ノハ^ノ戸^ノを^{カクシロ}坐^セし^テハ^ノ周^ノと^シ又

座^ノに^{カクシロ}即^シて^シ詔^ノ有^ルと^シも^{カクシロ}亦^{カクシロ}國^ノヲ^{カクシロ}祭^ル神^ノ明^ノ憑^ル談^ル乃^シリ

史^ノヨリ^{カクシロ}ハ^ノ戸^ノを^{カクシロ}以^テ主^トと^シて^シハ^ノ尾^ノ西^ノ大^ノ國^ノ靈^ノ神^ノ社^ノ

五^ノ月^ノ六^ノ日^ノヲ^{カクシロ}神^ノ幸^ノ童^ノ男^ノを^{カクシロ}以^テ戸^ノと^シ以^テ實^トと^シ古^ノ風^ノ之^ノ又^ノ熱

由^リ宮^ノ御^ノ尸^ノ立^テの^{カクシロ}秘^ノ器^ノ祭^ノ主^ノ尾^ノ張^ノ宿^ノ祢^ノ此^ノ知^ル可^ク

して^{カクシロ}を^{カクシロ}殊^ノ勝^ノ乃^シ沛^ノ正^ノ鉢^ノと^シて^シカクシロ

米^ノ字^也也^ノ 是^モ亦^モ米^ノ字^也也^ノ

是^モ等^ノ之^ノ字^也 通^スよ^リん^トり

馬^ノ

犬^ノ

豚^ノ

象^ノ

魚^ノ

龜^ノ

是^モ等^ノ之^ノ字^也 六^ノ書^ノ精^ノ蘊^ノ六^ノよ^リん^トり^{カクシロ}等^ノ之^ノ字^也 是^モ等^ノ之^ノ字^也 字^ノ有^ルハ^ノ益^ノの^{カクシロ}

類聚神祇本源十五卷從三位度會神主家行

撰入元應二年初湯中句上序見タリ按元此書撰述ノ時ハ家行三ノ祢宜正四位ノ上也

篇目

天地完麟篇漢家本朝 天宮篇

本朝造化篇 天神所化篇

禁誡篇 神道玄義篇

神宣篇 宝基篇

形文篇 神鏡篇

外宮遷座篇

外宮別宮篇

心御柱篇

内宮遷座篇

内宮別宮篇

以上十五篇

按神鏡篇終曰此卷依ニ北畠一品入道家之召

借進之處御書写可レ照進ス彼書写御本之由被

仰下之間披見之處被貽此真書ラ了シス

彼詞云

丁巳秋九月於勢州宿館以外宮祢宜家行
神主本手書之此抄十五卷先以寫畢於當卷
者依秘中秘為別卷一奏覽之時猶留之適經回
當國之間為結縁一見之由所相談也因密
々寫留更不可他見矣

以此見之則神鏡篇蓋此書未嘗歛實彼一篇
二所御内院御靈形等悉載之讀之則之未學
莫不敬而讀之焉

神道集七卷權律師快叡居院永亨五年於尾

刈朝日寺書之云古本今在大須真福寺藏然
存第一第三第七三冊餘闕矣此書固淳房氏
妄作雖不足見之而今世事出自秋氏之書而
為神家之故者此書多證佛書記之實足知其
本據今日鳴神字綱利名者未見古書故依文
字附言語以為牽合之說尤多々而吉川惟足
之門派殊私家附會甚矣小子明辨之勿惑彼
徒之偽說

。府城 東照宮舞樂自敬公在世之時大槩定之

。四月十六日

平調

五常樂音樂、拾翠樂音樂、拍振笛鼓計

大食調

太平樂有舞

高麗音取

拍振有舞

陵王

前乱序笛鼓計有舞
後乱序同之

納蘓利有舞、長度子音樂

每年如此然誠公請朝家樂官使傳秘曲

於我伶人自此還城樂五常樂散去破陳樂去

速賀殿林哥等新舞

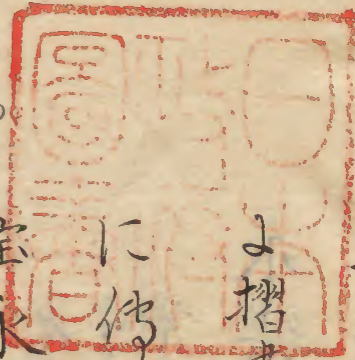
。十七日朝音樂

平調音取

五常樂、太平樂、長度子

。神行音樂

長度子ケニ、長度子
ケニトモ、長度子
本ノ儀、ケニトモ、ケニトモ



年に明に使し書法才きの稱を明人よ得後
 子摺書を以永樂錢の文字を書せしむるは天下
 に傳る所乃永樂通寶の古錢ハ中山筆跡と云ん
 宝永二年乙酉二月十三日 禁裏御領一萬石

御増附 御使大南五郎在列

同三年丙戌正月廿八日 南政院 御所御領三千石御増

附 御使山民部

